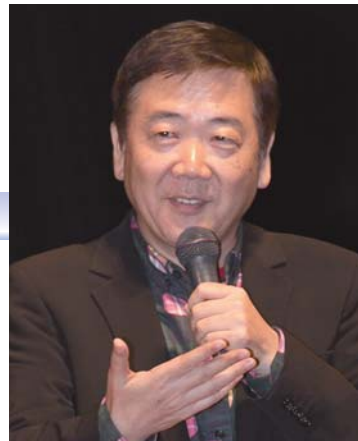


2015年度FUJITSUファミリ会 秋季大会 記念講演

作家・演出家 **鴻上 尚史** 氏

こうかみ しょうじ 1958年愛媛県出身。早稲田大学法学部出身。1981年に劇団「第三舞台」を結成。以降、作・演出を手掛ける。「朝日のような夕日をつれて」で紀伊國屋演劇賞、「天使は瞳を閉じて」でゴールデンアロー賞、「スナフキンの手紙」で岸田國士戯曲賞など受賞多数。2012年に第三舞台を解散。現在はプロデュースユニット「KOKAMI@network」と、2008年に若手俳優を集めて旗揚げした「虚構の劇団」での脚本・演出を中心に活動。海外公演での演出も多数。活躍の場は、舞台公演のほかにも、映画監督、小説家、エッセイスト、ラジオ・パーソナリティー、脚本家など幅広い。桐朋学園芸術短期大学教授。



日本人に欠ける、「表現」の技術と工夫

22歳で劇団を作ってから30年以上演出家をしていますが、私が「表現」ということを本当に意識したのは、30代後半に1年間イギリスの演劇学校に留学したことがきっかけです。そこで、イギリスではいかに演劇が社会に根付いているかを知りました。演劇学校の先生たちは夏休みになると企業に出向き、スピーチの指導を行います。パーティー文化が盛んなイギリスでは、パーティーでいかにユーモアのある魅力的なスピーチをするかがとても重要なのです。欧米では政治家に演出家がついていることも有名な話です。イギリスで、演劇人が現実の生活に演劇を還元していることを見て、私はショックを受けました。日本では、息子が劇団を作るとか演劇を始めたなどと言うと、親や親戚はその子の将来を諦めてしまう、そんな風潮があります(笑)。イギリスから帰国した私は、人生を一杯棒に振ろうと思って始めた演劇を、こんなことではいけない、自分のこれまでの経験とイギリスで得たことを「表現のレッスン」というかたちで伝えていくべきなのではないかと思い始めました。

表現のレッスンを後押ししたもう一つの理由は、「IT評論家として私が参加した日米のシンポジウムでの出来事です。プレゼンテーションで、アメリカのソフトウェア開発者が自分の作ったゲームを、身ぶり手ぶりを交えて説明する一方、日本の開発者は、消え入りそうに下を向いてブツブツつぶやいている。どう見てもアメリカ人の方が面白そうです。ところが、シンポジウムが終わり、交流会の場でそれぞれのゲームをやってみると、日本人が開発した方がはるかに面白い。そのとき、「これはいかん」と思いました。私たち日本人には、心の中で思っていればいつか通じるという、コミュニケーションをテレパシーか超能力のように考えているところがあります(笑)。しかし、正しく伝えるためには、それを表現する技術や工夫が必要です。日本人にはそれが欠けていると痛感しました。



コミュニケーションの「三つの輪」

ロシアの著名な演出家で俳優でもあるスタニスラフスキーは、私たちが生きている状態、つまり状況は「三つの輪」に分類されると提唱

しました。まず「第1の輪」とは、自分だけの世界。考え事や読書など何か一つのことに集中して、周りに関心がない状態です。「第2の輪」とは、特定の相手に関心や集中が向かっている状態。そして「第3の輪」は、自分の目に見える風景すべて。2人以上のみんなに向かっている状態です。私はこの分類に、それぞれの状況に対応する言葉というものも、またあるのではないかと考えました。第1の輪に対応する言葉は自分に話す「独り言」。第2の輪に対応するのは「あなたと話す言葉」。第3の輪は「みんなと話す言葉」です。そして、この状況とそこで使われる言葉に「ずれ」が生じたとき、私たちは居心地の悪さを感じるということを発見したのです。

例えば、ファストフード店に入ってハンバーガーを注文したとき、レジの女性が注文名を繰り返した後すかさず、「今キャンペーン中の〇〇シェイクはいかがですか?」と続けられると、私はいつも違和感を覚えます。それは、状況は第2の輪でも、彼女の言葉はにこやかな「独り言」になっているからです。「いらっしゃいませ、こんにちは」と挨拶するファミリーレストランやコンビニエンスストアもそうです。こんな日本語はありません。客が全然来なくて30分も待ってやっと来た。うれしくて「いらっしゃいませ」だけではとても気持ちがおさまらないので、「こんにちは」も言ってしまったという状況ならわかりますが、1分間に3人も4人も来るようなお店で、全員に「いらっしゃいませ、こんにちは」と言っている。人間が日常使わない長い言葉を無理に音声化しようとするとき、その言葉は間違いなく独り言になります。

よく日本語を駄目にするのは若者だと言われますが、日本語を駄目にするのは企業、それもマニュアルを作っている上層部のエリートたちです。おそらくこういう人たちは、演劇など見たことがないのでしょう。演劇が好きで人間がしゃべる言葉を知っていたら、「いらっしゃいませ、こんにちは」などという長く重複した言葉が出てくるはずがありません。

このように、第2の輪が第1の輪になることは非常に多いのですが、第3の輪になることもあります。それは、テレビの通販番組などで、状況が2人なのに、視聴者にアピールするために第3の輪の会話をしているときです。また、みんなに話しているはずの第3の輪が、第1の輪になることもあります。例えば、駅や空港で名産品をひたすら連呼しているとき。「〇〇はいかがですか?」という第3の輪の状況で第3の

輪の言葉を使っている、いつの間にか、ある型にはまった機械的な独り言になっている。このように状況とそれに対応する言葉があっても、それがずれていることは頻繁に起こります。



状況に合わせ、表現で遊ぶ

状況と言葉がずれると非常に居心地が悪いということに気づくと、さらに、新たな疑問が起こってきます。それは、状況と言葉をわざと意識的にずらすことはないのだろうかということです。例えば結婚式のスピーチでは、ほとんどの人が第3の輪で第3の輪の言葉のまま話し続けます。しかし、「新郎と僕は高校も会社も一緒に、(新郎に向かって)おいヨシオ、あのときだよ、お前がすごいプロジェクトを任されてさ、(1人でかみしめるように)おれだったら絶対駄目だったよ、お前本当にすごかったな。(会場に向かって)皆さん、彼は本当にいいやつですよ」などと、第3の輪から強引に第2の輪に持っていき、さらに第1の輪に入って、再び第3の輪に持っていくことだってできるのです。状況が第3の輪だから第3の輪の言葉を使い続ける必要はないのです。これは、表現で遊んでいるということです。

スタニスラフスキーは、俳優向けのマニュアルを作るために三つの輪を提唱しました。彼は、第1の輪を特に「公衆の孤独」と呼び、俳優であるあなたがもし本番で突然セリフを忘れてたり自分の感情を見失ったりしたときには、堂々と第1の輪に戻って自分の感情を立て直し、記憶をよみがえらせてから再び第2の輪の相手役や第3の輪の観客に向かってしゃべりなさいと言っています。この第1の輪の使い方は、私たちの日常でも応用ができます。結婚式の例で言うと、人前で上がってしまい、第3の輪のまま焦っている人がよくいます。そのようなときは、一度、第1の輪に入ってみることで自分を立て直すことができます。これを無意識にやっている人は案外多いのです。

日本人は一般的に、第2の輪の状況で第2の輪の言葉をしゃべることが苦手なようです。部下を持っている方ならわかりになると思いますが、リストラや給料を下げる、叱責するなど厳しいことや大事なことを相手に伝えなければならないとき、私たちはしばしば第1の輪の言葉になりがちです。母親が息子や娘を叱るときにも、母親は途中から興奮して大抵第1の輪の言葉になっています。嫁と姑の対決も、実は第2の輪と第1の輪の言葉のずれでしかないと私は思っています。独り言だから、どんどん言葉は過激になっていくのに、聞いている側には独り言は届きません。ですから、自分が何かの状況で独り言になってしまったときには、どんなに熱く語っても、それは独り言なのだから相手には届いていないということを知るべきです。

第2の輪から第3の輪になる場合もあります。先生などがその例で、個人面談で話しているはずが、「あなた」ではなく「この学年は」など、日ごろ使って定着している第3の輪の言葉で語り始める先生が結構います。また、会社の社長や上司の方から、従業員一人一人に声をかけているのに、社員との距離が埋まらないのはなぜかという質問を受けることがあります。それは一人一人に第3の輪の言葉で話しかけているからです。声をかけられた方は、「私は大勢の中の一人」という印象を抱くばかりで、それではかえってマイナスです。「〇〇さん、調子はどう？」と相手の名前を付け加えるなどすれば、状況は第2の輪となり、相手はうれしく思うはずです。



思いを伝える技術とは

三つの輪に対応する言葉をあえてずらすという工夫のほかに、同じ言葉を違う輪で使うことも可能です。例えば、シェイクスピアの「ハムレット」に出てくる「生きるべきか、死ぬべきか、それが問題だ」という有名なセリフは、20世紀半ば過ぎくらいまでは、聴衆に向かって第3の輪でずっと語られていました。ところが、20世紀の終わりになると、下を向いてブツブツ言うのがかっこいいという演技論が世界中に広がり、独り言のハムレットばかりが現れるようになりました。今では、第2の輪で一人の観客にハムレットが朗々と語りかけるテクニックも出てきました。

三つの輪もそれに対応する言葉も道徳の話ではないので、どのように使うかに決まりはありません。大切なのは、どうすれば自分の思いをきちんと伝えることができるかという方法を知ることです。自分は今独り言でしゃべっているのだから、相手には伝わっていないということがわかっていればいいのです。相手に伝えるために第2の輪に戻るのも、今日はこの辺でやめておこうとするのもそれは自由です。このような技術を、私は「教養」と呼んでいます。私にとっての教養は、「そのことを知っていて、それをうまく使うことができる」ことです。私は、「言葉の教養」「声の教養」「体の教養」「感情の教養」と四つの教養を定義しています。どんなにスタイルがよくても、どんなに筋骨隆々でも、自分の体をよく知ってうまく使えなければ体の教養はないわけです。

状況の輪や言葉、自分の状態を上手にコントロールするためには、その場の空間と対話することも大切です。これは、プレゼンテーションの前などにもおすすめの方法ですが、前もってその場所に立ってみて、全体の空気を吸って自分の体に入れておくと、ドキドキ感や緊張を減らすことができます。すばらしいパフォーマンスができる人は、体とその空間が対話しているのです。マイクがなかった時代は、講演会ではずっと大声で第3の輪の状況でしゃべらなければいけませんでした。しかし、今はマイクがありますから、第2の輪で話すことができます。途中から誰か一人に向かって話した方が、よく伝わることもあります。ご自分なりの工夫をしながら、表現の技術を日々のコミュニケーションに役立てていただければと思います。

